

コロナ時代の日本と世界： 新たなパラダイムを危機とするか機会とするかを考える



In collaboration with the
APRU Population Aging Program Hub

COVID-19は、世界・国・個人に大きなインパクトを与え、今後、地殻変動ともいえる変化をもたらすと考えられます。コロナ第一波への日本の対応は、その過程で情報基盤の脆弱さや革新と社会実装の遅滞などを明らかにしており、第二波が来る前に、至急強化が図られねばなりません。

本セミナーでは、広範な影響を多面的に解析し、現在の取り組みの紹介にとどまらず、第二波に備えて至急実施すべきこと、コロナ時代の新しい社会を作るため半年程度で実施すべき施策について、各分野から提言をいただきます。

開催日時

第1回 医療と科学技術

2020年6月17日（水） 17:00-18:30

第2回 経済と労働

2020年7月 1日（水） 17:00-18:30

第3回 社会と法律

2020年7月15日（水） 17:00-18:30

第4回 総括討議

2020年7月29日（水） 17:00-18:30

開催方法

Zoom Webinarによるオンライン配信

申込方法

下記URLより、各開催日の2日前までにお申込みください。

https://keio-univ.zoom.us/webinar/register/WN_Mks9cByPST-qJmB7Qs5x8w



17:00-17:10

【開会】 コロナに立ち向かう慶應義塾のグローバルイニシアチブ

安井 正人

慶應義塾大学グローバルサーチインスティテュート（KGRI）所長。医学部教授（薬理学）。

1989年、慶應義塾大学医学部卒業。聖路加国際病院研修医、東京女子医科大学母子総合医療センター助手、スウェーデンカロリンスカ研究所大学院博士課程、米国ジョンズホプキンス大学ポスドク、講師、准教授を経て2006年に義塾医学部薬理学教室の教授に就任。専門は小児科学、薬理学。2018年よりKGRI所長。水チャネル、アクアポリンの研究に従事し、最近ではアルツハイマー病と睡眠の関連性についても研究を進める。国際交流を推進し、グローバルリーダー育成にも力を注いでいる。

17:10-17:30

【講演1】 アジア地域におけるCOVID-19対策：教訓と将来展望

葛西 健

世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局長

1990年慶應義塾大学医学部卒業。旧厚生省（現厚生労働省）に入省後、岩手県高度救命救急センターにて勤務。その後、厚生労働省結核感染症課国際感染症専門官、大臣官房国際課課長補佐、宮崎県福祉保健部次長等を歴任。ロンドン大学衛生熱帯医学大学院で修士号を取得。感染症や健康危機管理の専門家としてのWHOでの勤務は15年以上にわたる。2006年WHO西太平洋地域事務局感染症対策課長に着任後、健康危機管理部長を経て、2012年WHOベトナム代表に就任。その後、WHO西太平洋地域事務局次長兼事業統括部長を経て、2018年10月の地域事務局長選挙で当選。

講演概要：

WHO西太平洋地域事務局管内の国々では、今のところ武漢を除き地域内で大規模市中感染は発生していないが、パンデミックの終焉はまだ先である。

この地域の多くの国は、基本的な感染症対策（①感染の発見・隔離、接触者の追跡調査・検疫するシステムの円滑な運用 ②マルチソースサーベイランス ③コミュニティエンゲージメント）に加えて、比較的早い段階で移動制限を含む厳しい公衆衛生措置を導入した。

これらの政策により、管内の国々は大規模市中感染には至っていない。一方で公衆衛生措置による経済的影響は甚大である。さらにこのウィルスは社会の弱点につけ入り、社会の抱える様々な課題を顕在化させた。

感染拡大の防止と社会経済活動をいかに両立させるのか、顕在化された課題にどう取り組むのか、各国は難しい局面に立たされている。この局面を乗り越えるためには、新たな社会、新たな常態（ニューノーマル）の創造が必要であり、これをどう実践するのか、ヘルスセクター、プライベートセクター、地域社会が対話を通じて決断する必要がある。その実践にあたっては、ITやイノベーションが重要な役割を担う。我々は未来に見据えていた課題や目標に加速度的に取り組むことになったが、これは、よりよい社会を早期に実現する機会を得たと捉えることもできるだろう。

17:30-17:50

【講演2】 日本が医療崩壊を免れた「ファクターX」を探せ

中原 仁

慶應義塾大学教授（内科学）、KGRI副所長。

2003年慶應義塾大学医学部卒業、2007年慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程修了、博士（医学）、日本神経免疫学会理事、日本多発性硬化症ネットワーク理事、PACTRIMS中央委員、日本神経学会代議員、日本内科学会評議員。

講演概要：

本邦初のCOVID-19 患者が確認されたのは2020年1月15日であった。翌2月には、かのダイヤモンド・プリンセス号が日本に帰港し、結果として712例の感染者を出すこととなった。日本及びアジアにおける感染者数増加を受けて、アメリカ合衆国をはじめとする諸国が日本人の入国禁止措置を検討し始めたのが3月上旬であった。しかしながら感染は思いもよらず欧州やアメリカ大陸に拡大し、COVID-19患者数は爆発的に増加し、あっという間に日本を追い抜いた。3月下旬には多くの専門家が、東京は数週間内にニューヨークが直面している医療崩壊に見舞われると警告を発した。4月7日には本邦において緊急事態宣言が発出されたが、他国に比べると明らかに緩い「自粛」に過ぎないものであった。にもかかわらず、人口当りの犠牲者数は、米国や欧州諸国の約1-2%程度に留まっているのが現実である。これが単なる奇跡でないならば、日本が医療崩壊を免れた「ファクターX」とは何だったのだろうか？

17:50-18:10

【講演3】 メドテックエコシステム ～ 緊急対応からの学びとポストコロナ時代の連携 ～

竹村 研治郎

2002年慶大院後期博士課程修了。博士（工学）。慶應義塾大学理工学部機械工学科助手、東京工業大学精密工学研究所助手、助教を経て2008年より慶應義塾大学理工学部機械工学科専任講師。現在、教授。2006年豪州Monash大学訪問研究員、2019年米国UC San Diego訪問研究員。超音波振動子や機能性流体を利用した細胞培養システム、触感測定・呈示システム、ソフトロボットなどの研究に従事。

講演概要：

新型コロナウイルスの発生に端を発したCovid-19パンデミックによって世界は混乱している。ワクチンや特效薬がなく、変異の可能性も予測できない新型コロナウイルスに対する対策はStay at homeやSocial distancingの言葉に象徴されるように極めて原始的で、私たちの行動や生活は大きく様変わりした。不便さに耐え、元の生活を取り戻す努力も大切であるが、来るべきCovid-19収束後、あるいはCovid-19との共存の時代をよりロバストなものとするための社会構造の大改革こそ、次なる危機への備えであるとも言える。このため、最も大切な生活インフラのひとつである医療をより頑強で効率的なものにするために、Covid-19緊急対応プロジェクトからの学びに基づいて、医療現場や実社会との連携を伴う新たなメドテックエコシステムの必要性を提言する。

18:10-18:30

【閉会】 まとめ課題リストと優先順位

中谷 比呂樹

慶應義塾大学特任教授（グローバルリサーチインスティテュート：KGRI）及び国立大阪大学大学院医学系招聘教授（公衆衛生）。併せて、前世界保健機関（WHO）執行理事会議長、厚生労働省国際参与、（公社）グローバルヘルス技術振興基金（GHIT Fund）代表理事、環太平洋大学連盟人口高齢化研究ハブ・ディレクターなど様々な公益事業に関与。教職に就く前は、40年にわたり国内外で公衆衛生専門家として活動。2007年3月から2015年5月までWHO本部事務局長補（ADG）。慶應義塾大学医学部卒、医学博士。

コロナ時代の日本と世界： 新たなパラダイムを危機とするか機会とするかを考える



In collaboration with the
APRU Population Aging Program Hub

第1回 医療と科学技術

2020年6月17日（水）17:00-18:30

開会

17:00-17:10

コロナに立ち向かう慶應義塾のグローバルイニシアチブ
安井 正人（KGRI所長／慶應義塾大学医学部教授）



講演1

17:10-17:30

アジア地域におけるCOVID-19対策：教訓と将来展望
葛西 健（WHO西太平洋地域事務局長）



講演2

17:30-17:50

日本が医療崩壊を免れた「ファクターX」を探せ
中原 仁（慶應義塾大学医学部教授／KGRI副所長）



講演3

17:50-18:10

メドテックエコシステム
～ 緊急対応からの学びとポストコロナ時代の連携 ～
竹村 研治郎（慶應義塾大学理工学部教授）



閉会

18:10-18:30

まとめ課題リストと優先順位
中谷 比呂樹（慶應義塾大学KGRI特任教授）

